

歴史記憶をめぐって

—西北「回民起義」に関する語り—

田村和彦

(福岡大学人文学部東アジア地域言語学科)

1 問題の所在

- 1-1 口述と記述「歴史」の記憶のあり方をめぐって
- 1-2 人類学的中国研究におけるコミュニティスタディの超克の方向性としての歴史
- 1-3 発表者のフィールドの状況

2 地域の文字資料から見た回民蜂起—文字資料における傾向性—

2-1 1949年以前の「郷土志」、地方志「県志」における回民蜂起

戦乱としての記録：1907a, 1907b, の郷土志、1923, 1932, 1949(未刊行)¹

記述は戦闘の過程や現地の被害状況(派遣された將軍や団練の組織者、一般漢人の受難者)を中心地域社会の秩序から見た蜂起軍の様子

→様々な制約を受けた地方志をそのまま客観的な事件を描写したのものとして受け取ることができないが、ここでの記述は部分的に今日の地方志で再利用。

2-2 新たな枠組みの提示—中国史のなかの回民蜂起—

辛亥革命以後、清末の蜂起を肯定的に捉える動きか(?)

→1949年までの当該地域における文字記録には反映されず

范文瀾や白寿彝といった中国近代史、回民民族史のなかで確立した革命史的位置づけ

→今日の文字記録のなかで地域の文字記録へ影響したと思われる。

大局的な歴史のなかでは蜂起の一部である当該地域への言及は僅か、枠組みとして受容

その過程で、清(満)に欺かれた漢人と回民の対立という構図は変化し、漢回対立へ先鋭化

2-3 今日の地方志に見られる回民蜂起—消費主体不鮮明の「回民起義」—

1990年代になると、当該地域でも新たな地方志が繰り返し編纂される(1993、1996a、1996b、2000)

回民という民族による生存のための武力闘争として記述

→記述主体の転換により漢人の被害は触れられず、蜂起の意義と清軍による鎮圧の残酷性へ記述が移行する。この結果、「咸豊同治年間、回乱大作、千里無煙、鷄犬甚少聲、異族侵陵、殺人流血的慘劇」(1931:党)など、近年の陝西省中部を語る上で常に言及されてきた村落の再建、移民、キリスト教の伝来などを整合的に説明できなくなっている。これらの新たな記述はフィールドの人々にはまったく知られていない。かれらはまた現在の行政範囲の人口の2%前後(2000年)を占める回族との直接接触の機会もないため、新たな歴史枠組みについて情報を得る契機から阻害されている

¹ 本発表では現存する県レベル以下の地名、人名については表記しない。

(文字における歴史の詳述化と、当該地域での想像上の回民との対話継続)。

正史や実録ではなく、地方志からみた回民蜂起は、時代の要請する歴史記述のありかた、記憶のしかたに大きな影響を受けており、必ずしも一貫した像を結んでいない。

3 フィールドで語られる回民蜂起—「回回乱」をめぐる多声的な状況—

3-1 事件史としての回民蜂起の記憶

地域社会に起こった事件としての語り

→被害にあった家族や当時の各村落、いくつかの家族の対応を中心に、被害者としての漢人社会の記憶。

事例①

(回民起義が始まる)最初に渭南に行った回民がいたそう。その時はほんの少しで、ほとんどの回民村は以前と同じにそのままだった。そのあと、西安の方から来たという回民の集団が村を回ってこのあたりの回民村でも男が集まって民団と戦うようになった。この年は、雨が少なくて作物の出来が悪かったそう。乱が起こったのはそんな年だったからだろう。

事例②

回回が集まっていくつもの村の回民が一緒になって乱暴したり村人を殺害し始めた頃、文人の紳士の楊何某という者が民団を率いて回民と戦った。けれどすぐに負けて民団はばらばらになり逃げ帰り、楊も殺された。(抵抗した者は-発表者補足-)ほかにも居た。それは民団の頭でこの付近の村の男だった。怪力で人望も厚かったが回民に殺されて、その後で、服従しなかったので妻も探し出されて殺された³。

事例③

回民村が西安府からやってきた回民軍に呼応する情報を得て、廟⁴に宗族の老人を集め議論の結果、占いをよくする者と呼んで、今後の事態を予測することとした。呼ばれた村外の男性は、人々の前で小麦を篩う箒の端に筆をくくりつけ「扶乩」を行い、その結果、白紙の上書き出された文字から「要得回回没 除非將軍多」との啓示を得た。男性は加えて「討伐軍にはきつと將軍が多くやってくる」と述べた。そこで、八旗軍の到着があるまで隠れることに決めた。結果、やってきた軍隊に將軍は少なかったが、「姜」姓が多かったので、占いは正確ではなかったが外れたともいえない。

→文字記録と比較すると、団練の頭目や將軍の名前、事件の時期など固有性が欠落。ただし、文字記録が多い事件ゆえに、一致と思われる事例を見つけることが可能なものもある。これは性質の異なる資料が、異なる条件の中であっても記憶の選択性のなかで同一例を記憶したことによるのではないか。

3-2 生活のなかに埋め込まれた回民蜂起の記憶

婚姻してはいけない村や変則的な人間関係、窯洞の掘れない場所や廟の霊験などの語りの中に分散

→「事件」の取材調査としては現われにくい形で断片的に存在。事件史の語りよりも固有性が高く、発話される機会も多い。

² 県志の1862年「夏、関中大旱、渭河断流」に相当か。

³ 県志「殉難」から、楊某は舉人の楊培と推察され、後者はその出身地と経歴、妻の殺害という点から張福寅と思われる。

⁴ この廟を含め、周辺村落にあった廟はこの時期に回民軍によってすべて焼き落とされている。

事例④)

ある大宗族の居住地では、街道に面し往来する回民軍から度重なる襲撃を受けていた。やがて、宗族の老人を集めて相談の結果、降伏を決意し降伏の旨を記した白い布を村の入り口と祠堂を兼ねている廟へ掲げた。その結果、渭城府から出撃した回民軍の休憩地となり食料を供給する仕事を負った。清軍が到着し回民軍の形勢が悪くなると、周辺村落からの報復を恐れて彼らと一緒に回民になって西北の方向へ落ち延びた村人がいた。

かれらは回民に味方したので、回民と婚姻しないように、この村には嫁をしないことになった。

<婚姻範囲の話題から一発表者による要約>

事例⑤

回民の村人が西安府からやってきた回乱軍に加わる情報を得て、廟⁵に宗族の老人を集め議論の結果、占いをよくする者と呼んで、今後の事態を予測することとした。呼ばれた村外の男性は、人々の前で小麦を篩う箒の端に筆をくくりつけ「扶乩」を行い、その結果、白紙の上に書き出された文字「要得回回没 除非將軍多」の啓示を得た。(話者はこれを多くの軍人が来て回乱軍を追い出すと解釈した)。そこで、軍人の到着があるまで皆で隠れることに決めた。結果、やってきた軍人に將軍は少なかったが、「姜」姓が多かったので、占いは正確ではなかったが外れたともいえない。<以下略>

<村内にある廟の靈験についての話題から>

占いを信じずに逃げ出した二十数人の集団は乱の鎮圧後二人しか帰ってこなかったことから、廟の靈験が強調される。

事例⑥

回民の兵士がやってくると、入り口を隠した小さくて曲がりくねった「地窖」のなかに隠れた。入り口が見つかれば唐辛子と雑草を混ぜたものを入り口で焚かれて、窖に逃げ込んだ人々も燻し殺された。火をつけた枯れ草を投げ込まれることもあった⁶。回民軍が鎮圧された時に、この村には十七軒の家しか残らなかった。最初、村人は女性の顔を汚して子供に男装をさせた。回民軍が現れた最初の頃は行き会う男性、老人も若者も、その場で殺害されたけれども、彼らは女性を殺すことはなかった。女性で初期に殺されたのは、回民に抗った人だけだった。そこで、生き残った人々は男の子供たちに女の装飾品をつけたり、女の服を着せた。この工夫は効果があったが、しばらくすると男も女も変わりなく、隠れていた人々も殺され始めたので夜間に逃げ出す人々が始まった。そのうちに清軍との戦闘が行われて、回民を見なくなってから人々も昼間にも「地窖」を出て、夜も明かりを灯すようになった。

<窖洞を掘ってはいけない場所について>

- 回民蜂起の記憶の中で最も多く聞かれる。この口述のあとに、某家の隣、西側など具体的な場所が説明される場合と、窖を拡張する際に人骨が出た話、祟りで死んだ人物の話などが続けられる。

窖洞に関しては、回民軍が大声で歌ったという「鴉の巣であれば竿で突き破るが、地中の鼠は捕まえ難い」の台詞が記憶されているが、これは当該地区の農村概観研究(1936)、口述伝承を集めた書籍(1989)にもほぼ同文句がみられる。

⁵ この廟を含め、周辺村落にあった廟はこの時期に回民軍によってすべて焼き落とされている。また、同時に話をしていた男性は「扶乩」を一貫道と説明した。

⁶ 県志人物志、特に「烈女」、「孝女」の記述に複数個の類似例を見ることができる。

事例⑦

高利貸しを営んでいた男性は、起義が波及した初期段階に惨殺された。この男は、回民の多数人に対して普通より高い金利を要求したため以前から怨嗟の対象となっていた。付近の回民は武器を携えた回民軍の兵士を伴って金貸しの家へ押し入り、主人を引きずりだして鉄鉤であごを引っ掛けてつるし上げ、喉を掻き切った。これは豚の屠殺で用いる手法であって、当に豚のように殺されたわけである。この状況を見て妻は発狂して走り去り行方不明となった。

—ある富裕家庭が村からなくなった理由について(重複を発表者が整理)—

事例⑧

反乱が終わった後、移り住んできた人々のなかに両親のない子供がいた。住み着いた窯洞のすぐ上に土饅頭があるので、両親の墓といっしょに草をとったり、きれいにしていた。ある時、身なりの良い婦人が供とやってきて、これは誰の墓だと聞く。少年は答えて、知らないがここにあるから掃除していると答えた。老婆はどこに住んでいるか聞くので、少年は自分の住んでいる崩れかけた窯洞を指すと、老女は驚いて「これもなにかの縁」というと、すぐに中に入って奥の土を掘り始めた。なかからはお金が出てきて、老女は言った。「ここはもともと私たちの住んでいた場所で、あの墓は夫のものです。追われて私たち回民は逃げましたが、そのときに財産を隠しました。もう随分年をとったから、心配になって今帰ってきたのです。このお金はあげるの、これからもあの人の墓を守りなさい」と。それが今の某の祖先で、解放前は金持ちだった。

<隣村の財東家の富の取得についての伝説から>

事例⑨

回民村というが、漢人も住んでいた。羊が草を食べるとか、子供が喧嘩するとかあったが、それは漢人でもあること。義兄弟が回民になったり、(反乱のとき)それに助けてもらったりした人(の子孫)も知っている。

<後の調査でかつての回民村と想定された村落での聞き取り>

事例⑩

某村の某は回民の乱のときに子供で連れて行かれた。一緒に甘肅まで逃げて行ったが、大きくなって、中年になってから帰ってきた。村に知り合いがいなかったの、同じように帰ってきた郭という男と「親戚」になり、回民の生活をやめた。

< 同上 >

→生活のなかで取り上げられる回民蜂起の記憶は多方面にわたる(事例④～⑥)。これらは事件史としての回民蜂起の語りに比べて断片的であるが、再記憶化される機会が多い。一方である家庭の盛衰を説明する伝説のなかにも回民蜂起は用いられている(⑦～⑧)。⑦が事実とされ、⑧が伝説として語られる違いがあり、同じレベルで記憶されていない可能性はあるものの、これらは話し、記憶を共有する価値のあるものとみなされている点ではかわりがない。また、先行研究の記述するような漢回対立の先鋭化した記憶が現実性をもって語られる一方で(⑦)、同じく先行研究に現われる羊の放牧、皮革製品の売買をめぐるトラブルには言及しつつも、漢回という不変の基準で人々が積極的に袂をわかって武力衝突に及んだという思考では零れ落ちる事例もある(⑨～⑩)。これは「漢回雑居」と称された調査地域の特徴とも関連する現象と思われる。

3-3 口述と記述の歴史を繋ぐもの—口承伝承の文字化—

1949年以降の努力の結果、地方志や新たに作られた記憶を固定化する各種資料を通じて回民蜂起に関する当該地域の住民のもつリアリティへと接近することは非常に難しくなった⁷。

ただし、先述の口述資料と記述された資料を繋ぐ資料が存在する。

革命史への社会的正当性が高まる中で、1956年から翌年にかけて「実地調査」の実施(『同治年間陝西回民起義歴史調査記録』、出版は1993年)。西北大学歴史系民族研究室の編纂になるもので、4日間県人民委員会の手配の元、聞き取り調査と碑文、書籍の調査。「起義」の拡大地として選ばれた当該地域では(目的に合致しない方向の記憶で占められていたので)人民の立場から回民の反圧迫、反搾取運動としての性質を描き出すことはできなかったが、調査時の口述記録を文字化している。

→一部は今日の回民蜂起の記憶と重なる語りを含み、フィールドで聞かれる語りに最も親和的。1989年に出版された地域の民間故事集成は、インタビュアーやインフォーマントの年齢、生活村落が記録される事例もあり興味深い内容だが、編集者の配慮により回民蜂起の記憶を記載することは回避されている。

→しかし、村落の説明、風水の断絶、左宗棠の伝説のなかに、わかりにくい形ではあるが回民蜂起の際の漢人の避難方法などが記録されている。ここに挙げた二点の文字資料はいずれも村人に取材し文字化したものであり、この手法では今日の地方志における「記憶」へと結びつかない。

4 媒介を失った記憶の今後について

4-1 社会的記憶について

同時代性、当事者性という点で史料の重要度は低い今日の口述ではあるが、利害性について解釈を拡大することで、社会的記憶としての回民蜂起についての口述に意味を見出すことができるのではないか。あくまで生活解説として語られ、再記憶化される蜂起の諸相はそれを有意味とする文脈を失うことで、変化してゆく可能性を秘めている。

4-2 居住に関する状況の変化を一例として

旧来

本地人 居住空間の快適性や先住の利点から靠崖式窯洞を志向
客民(集団) 堤防の外側に「草房」を形成(1949年以後、耕作地の中に移動)

現在

道路状況の変化による利便性の変化、家電の発達、土地所有形態の変化、分家の多発といった生活状況の変化により靠崖式窯洞以外の房子(地上式窯洞、コンクリートの家屋)を増加。

⁷人民公社解体後の地名再設定の時期によく現れている。例えば、蜂起軍の命名した県名は村落名に残す一方で、紅旗公社といった全国に見られる名称も「清同治の時に回民起義を鎮圧した八旗の一つから命名するので、民族差別の含意がある。ゆえに地名一斉調査中に管轄内の古跡である某の名称からとって改名した」(出版年不明)とする。周囲の村落の命名例からは実際には八旗軍ではなく、人々の分類範疇として「旗」を用いた可能性もあるがこれらの検証はなされていない。

蜂起軍の拠点のひとつは蜂起軍による漢人の駆逐、清軍による蜂起軍の駆逐を経て無住の地となり、後に移民を配置することで村落名を改めた。近年新たに建てられた石碑による紹介では「もとの名を某家溝といい、某姓が住んでいたことに名をとる。清同治の時期に甘肅慶陽の三つの姓がここに移り住み、「恭行仁義」から更に命名した」とあるように、客民の村では成語や移民時の集団分類に名を求めることが多い。

文字化され人々にも知られる、つまり地域住民と今日の歴史枠組みの衝突が懸念される局面では、事件を語らず空白とする戦略がとられている。

→ 崖式窯洞建設の際に禁忌地となっていた由来に関する記憶を掘り起こす必要性の消滅

1980年代以降、様々な学問分野から「社会的記憶」に関する研究が進められたが、そこでは実際に社会的記憶が体現、証明される事物や景観、行為が注目されてきた。本節の取り上げた記憶に関していえば、居住に関する行為、景観のほかにも、大量死の埋葬場所の消滅、婚姻圏の拡大や再記憶化する場の減少、接触する少数民族の多様化による「我々」、「彼ら」の再設定など、記憶をめぐる外部装置は記憶が始まった140年間の間に大きな変化を遂げている。この問題については今後も継続的な調査が必要となろう。

最後に、ここで取り上げた記憶のありかたは、調査地の状況からもう一方の語りをもつと思われる回族側の記憶を検討することができなかった。その意味で不十分なものであることを認めつつ今後の課題とする。

《参考文献》

中田吉信

1959 「同治年間の陝甘の回亂について」『近代中国研究』第三輯、近代中国研究委員会(編) 東京大学出版会

1993 「中国における回族問題」『就実論叢-社会篇』No.22、就実女子大学

楊海英

2002 「十九世紀モンゴル史における「回民反乱」-歴史の書き方と「生き方の歴史」のあいだ-」『国立民族学博物館別冊報告』Vol.26、No.3

華源実業団(編)

1933 『陝西長安県草灘、涇河永楽店農墾調査報告』 華源実業団発行

邵宏漢、韓敏

1987 『陝西回民起義資料』 陝西省地方志編纂委員会

1992 『陝西回民起義史』 陝西人民出版社

張寄仙(編)

1936 『陝西省保甲史』 長安県政府保甲研究社

党晴梵

1931 「陝西文化的過去與未来」『西北研究』第2期 西北研究所

馬長寿(編)

1993 (1956-1957) 『同治年間陝西回民起義歴史調査記録』 西北大学歴史系民族研究室編、陝西人民出版社

范文瀾

1953 (1947) 『中国近代史』 上篇第一分冊(北京修訂版)、人民出版社

白寿彝(編)

1953 『回民起義』 3巻 中国史学会主編 上海:神州国光社

その他、新、旧地方志、檔案館所蔵地方記録、文史資料、民間伝承集成など

歴史記憶をめぐって

—西北「回民起義」に関する語り—

田村和彦

(福岡大学人文学部東アジア地域言語学科)

本発表は、1862年から翌年、および1869年に陝西省中部地域に発生したムスリム(回民)による蜂起を題材とし、事件の当該地域に居住する漢族の「記憶」のあり方を中心に検討するものである。

資料批判や文字資料の読解など歴史資料を扱う上でのトレーニングを受けていない発表者が限られた資料から上述の大きなテーマを扱うことには以下の意図がある。

回民蜂起の概要や起源、経過、その影響については既に歴史学による全体的な、また個別事象についての詳細な分析がある。中国国内においてもそれぞれの事件を位置づけ、中国史を構成する希求のなかで、回民の蜂起が民族的基盤に基づく反封建運動と布置したことから、歴史資料や民族史のなかで盛んに論じられてきた。これらは事実関係の探求や「我々」の過去を固定化する試みではあるが、同時に情報の受け手として明確な消費者を意識したものではなかった。言い換えれば、認識枠組みの差異から、事件の発生した地域に住まう人々がここで編み出された歴史を共有せず、異なる歴史を生きていることが十分に検討されてこなかった。中国国内では、たとえそれが歴史的産物であれサバルタンといった角度から彼らの事件へのまなざしが掬い取られることはなく、これらの分析枠組みを用いて現地の調査が進められるといったことから、自らの土地についてのある種の語り自らの認識とかかわりのない様式で単声的に進行するという奇妙な事態を招いた。ここに現われる問題群は、民族誌のオーディエンスの問題やオリエンタリズム論といった形をとって近年の人類学的研究のなかで繰り返し提出された主題でもある。本発表では、フィールドで聞かれる他声的で断片的である口述を、歴史学の豊富な蓄積を参照しつつ人類学の立場から報告することで、各方面からのご教示を請う次第である。

二つ目は、中国をめぐる人類学の状況に関する私的内省に基づく意図である。近年、様々な制約があるとはいえ部分的な現地調査が可能となり、地域的な偏りはあるものの集中的な特定地域の研究が続々と報告されている。こうした傾向は歓迎されるべきものではあるが、ここで得られた知見はどのような形でより大きな議論と結びつき、新たな中国社会への理解となってゆくのであろうか。早い時期からコミュニティスタディの手法が紹介された中国研究においては、緻密なデータの蓄積と同時に、コミュニティスタディだけでは明らかにできない諸相への関心が維持されてきたとあってよい。村落を越える人的紐帯や宗族、あるいは人の移動や経済関係をもとに「地域」を設定するなどの研究が試みられ、中国社会を検討するうえで大きな影響を与えてきたと振り返ることができるのであれば、今後

どのような対象と視点を得ることで人類学的手法を生かしつつ村落を越えた問題を扱うのか改めて考えてみたい。

一つの方向としては、早い段階から指摘されてきた歴史に関わる問題系であろう。歴史資料を用いた人類学的中国研究は既に様々な形をとって行われてきたが、社会史あるいは民衆史と呼ばれる領域が中心であったように思われる。それは文字化された資料が少ない分野で、歴史再構築の補助的な資料という意味合いもあって、現地調査、特に口述の資料が用いられる傾向と関連する。しかし、発表者は状況によっては正史として記録されている事件についても人類学的手法を試みる意義があると考え。その場合、とくに本発表で扱う事例についていえば、厳密な歴史像の再構成というよりは現在を生きる人々にとって意味を見出せる、今日の状況を説明するために遡及的に発話される歴史であって文字記録とはその性格を異にするものと考え。この意味で、ブロックの指摘に習ってこれら歴史に関わる共有された知識をとりあえず「記憶」とした。これは個人の認知作用のあり方がそのまま社会的な事象へと拡大できるという意味ではない。より適切な用語があれば変更することも念頭に置きつつこのような表記としたのは、過去に関する様々な事実関係のなかから記録する意味を見出し、語ることで再び人々に共有されてゆく過程を繰り返した、一定の体系性を持った、ときに情緒的な作用を伴う知識群を取り上げるためである。

当然、伝承過程での改編や個人の語りが起こる過程での選択性を考えねばならないが、本発表で指摘するように、1800年代後半から現在に至るまで文字記録においても物語性を志向した事実関係の取舍選択が行われていることが確認できる。問題はおそらく改編がなされるかどうかではなく、口述される歴史では、解釈しなおされてゆく過程を検証することができない点にあらう。よって、ここでは、後にみるように口述と一部の固定化された文字資料が多く共通内容をもつことを確認しつつも、事件に関する社会的な記憶を歴史再構築の直接的な資料とは位置づけず、あくまで現在の人々の生活を意味づける枠組みと限定して捉えておきたい。

第三には、発表者は偶然ではあるが、回民蜂起の主要地点付近で長期の調査を行う機会に恵まれたことから調査活動の過程で関連する語りに遭遇した。これらの(地域の人々にとっての)「我々」の歴史は、事件そのものを口承伝承として語るものもあるが、多くは村の生活習慣の変化や客戸の移民理由、婚姻規則、居住に関する逸話、神秘的ですらある得財古譚などに分散して記憶され言及されていた。これらは生活の諸相に埋め込まれているため、短期の集中調査では表出することが少ないものの、当該地域の現在を理解するためには重要な意味を持つ。とくに、文字資料には調査した周辺村落が紀元前から記載されているにもかかわらず、村落内に残る物質的な記録や人々の記憶からは遠い過去をうかがわせる資料がほとんどない状況にあって、インフォーマントの語る過去の起点が回民蜂起にあることが発表者の関心を引いた。このため、人類学的手法において検討可能な、現在の地域社会を検討する際の近過去として調査者側の遡及起点もこの事件に措定した。この第三目は、フィールドにおける歴史記憶深度の状況に従った結果であり、また村落社会の変遷を考察するうえでの作業上の必要でもある。

以上の理由から、同治年間に発生した西北地区での回民蜂起、特に陝西省中部地域で得られた文字、口述の資料を例として、歴史の記憶のあり方をめぐる報告を行う。

本発表では、まずはじめに当該地域の回民起義に関する文字資料について簡単な整理を行う。資料全体を詳細に検討するという方法はとらず、後に述べる口述の記録を得た地域についての事項が記録されている部分を比較する。この作業にあたって資料の作成された時期から資料を三つの範疇に分類する。

- ① 1890年代から1949年までの地方志の記載
- ② 1949年前後の回民起義に関する記載
- ③ 1980年代以降に刊行された新しい地方志における記載

比較作業の結果、①に該当する清朝期の資料と民国期の資料では記述に大きな差異が見られず、(当該地域にとって)外部からやってきた蜂起軍が当該地域に大きな被害をもたらしたとする、地域秩序の点から記述されていることが確認できる。注目に値するのは、政権が移行してもすぐに地域社会の記憶が転換したわけではなく、回民蜂起に関していえば、あくまで外部からの「賊」とその鎮圧という枠組みの中で現地の人的物的被害の状況が記録されている点である。理由として、記録をなす人々が大きく入れ替わることなく、事件を位置づける強力な様式が構成されなかったことで、旧来の認識が維持され記述が踏襲されたものと思われるが、この点については機会を改めて検討するものとする。

①での記述は現在の地方志との間に大きな乖離があるが、このような記述に変化が現われる転換期として②の時期をとりあげる。中華民国期には既に回民蜂起と同時期の太平天国運動への評価の転換が複雑な様相を呈しながら行われているようだが、調査不足によりここでは検討することができない。この点については発表者の能力を大きく超えることから、歴史学の蓄積によるしかない。ただし、少なくとも今日の地方志の記述を正当なものとして支える役割を果たしているのは、范文瀾らの示した中国近代史の枠組み、白寿彝らのまとめた『回民起義』で示された事件の読み解き方であると考えられるため、これを②の時期とした。この時期に取り上げる文字資料は、あくまで中国あるいは事件全体の描写を目的としているため、蜂起の初期的段階であった調査地の情報は簡単に触れられているにとどまり、清朝と回民、そして漢族という三者関係のなかで記述が進められていた。

事件に関する記述の量は③の時期になって急増する。地域で起こった出来事として地方志の一部に事件を記録している意味では①と類似するかのようと思われる。だが実際には、部分的な記述の踏襲を除いて同じ事件の記述が大きく転換している。最大の変化は、①では事件の記述主体が蜂起の鎮圧側であったのに対して、③では回民の「起義」軍を主体としたことにある。この結果、情報の受けてとしてどのような人々が想定されているのか不明確な記述に終始している。具体的には、蜂起軍という事件の主体は鎮圧の結果、西北方面へ移動しており、辛亥革命後になってこの地位に帰還した回民は多くはないにもかかわらず彼らを中心としたストーリーが編成されている。この地域が県西部の状況とは異なり

「漢回雑居」であり、両者には日常的な交流があったと考えられるが「民族」によって完全に区分される運動主体の闘争としか記述されない。同様に、蜂起へ積極的に参加しなかった人々は描かれることがない。中国近代史のなかで取り上げられていた清朝(満)、漢、回という三者関係ではなく、漢人と回民の対立としてのみ再記録化されている、などが指摘できる。

上記のいずれについても事件の主要な舞台となった地域の人々、少なくとも回民軍の拠点であった場所に今日居住する人々には知られていないことが重要である。

上述の作業で地域にとっての回民蜂起の概略と、文字による事件の説明のあり方にも変遷があることを確認した上で、つぎに回民蜂起について当該地域の記憶のあり方を取り上げる。ここでは主に慣行についての説明や伝説、世間話のなかで触れられた回民蜂起について事例を紹介する。

興味深いことにこれらの記憶のあり方は、文字資料①の時期の認識にもっとも近い。そして、近年刊行された、1956年から57年にかけて西北大学を主体に行われた実地調査(現地の人々への聞き書き、碑文調査)の成果と共通する部分も少なくなく、甚だしきは同一の情報と思われるものも認められる。注意深く制御された形ではあるが、80年代以降に編集された近隣農村における民間伝承集にも類似の状況が収録されている。このように、1949年以前の情報と、聞き書きを主要な方法とした調査に共通点が見られる一方で、今日の地方志による記憶とはかけ離れていく状況を報告する。

これまで紹介してきた、地域住民による回民蜂起に関する記憶は急速に消滅しつつあるように思われる。最後にこの問題を取り上げたい。それは記憶のあり方に関わる根底的な問題を含んでいると考えられるからである。

1999年に陝西省中部の調査を始めて以来、村落の成立や移民の経緯など口承伝承を収集してきたが、対話のなかで回民蜂起が話題になること、新たな情報が提供されることが少なくなっている。調査の範囲が自由に拡大できないことや、回民蜂起を主要な調査対象としていないことなど調査側の手法に関する問題もあろうが、元来、有意味な事象を見出し、選択的に行われる記憶作用のなかで、今日の生活説明において回民蜂起に言及する必要性が薄れている可能性も考えられる。ここではこれらを仮説的に、住居に関する慣行、婚姻に関する慣行の変化から検討する。何が記憶され、何が語られなくなるかという問題を議論するためには、おそらく長期的な継続調査が必要とされるであろう。発表者は資料の収集を始めたばかりであり、この種の議論を行うにあたって十分な準備がない。しかし、対面状況においてインフォーマントと直接交流を持つことができる人類学調査の性質を考えれば魅力的な考察対象であり、また現在の当該社会にとっての意味を重視して記憶という問題系を掲げる以上、不十分ながら若干の考察を加えることで、貴重なコメントを仰ぐ次第である。